



▲現在の吉野川の水防竹林（東みよし町三加茂）

水防竹林は、三好市池田町付近から下流吉野川市川島町にかけての吉野川中流域に多く残っています。その規模は日本一であると言われています。かつて吉野川の両岸には、幅広く大規模な竹林が万里の長城のように連なっており、戦前、徳島本線は竹の美林に沿って走る鉄道として有名で、その美しさは日本一と称されていました。

藩政時代には、財政的な理由などから吉野川の洪水を制御できる規模の堤防を築くことができませんでした。このため、徳島藩は沿川部や堤防に竹藪の植え付けを奨励しました。明治三年（一八七〇）の徳島藩「郡中制法」にも、「堤防川岸などへは柳呉竹などを植え、出水の節は囲に相なるべく常々心配りを遂ぐべきこと」と定め、竹林等の造成、保護につとめていました。現在の見事な美林の三加茂（現在は東みよし町）の竹林は、明治三二年（一八九九）の洪水によって村が大きな被害をこうむったさい、三庄村（現在の東みよし町三加茂）の村長が村の有志から寄付金をつのって、延長八二〇メートル、幅一八メートルにわたって植林したのが始まりです。成長し地下茎のからだんだん竹林は水害防備林と呼ばれ、洪水による浸食から川岸や堤防を守りました。また、洪水の水勢を弱め、岩や小石が耕作地に流入したり、家屋が流失したりすることを防ぐ役割を果たしました。

かつて水防竹林の竹材は物干し竿、釣り竿などにも利用されました。また、竹尺や和傘の原料となり、明治から昭和にかけて竹林を利用した地場産業の発達をもたらしました。今日では竹の需要が少なくなり放置された竹林が多くなっていますが、かつて川沿いの人々は、洪水被害を緩和するとともに、その利用により収益をあげることができた水防竹林を大切に育み、守ってきました。

水防竹林は吉野川を彩る風物詩であり、洪水と闘う流域住民の知恵でもあります。

背景

暴れ川四国三郎の異名をもつ吉野川は、藩政時代には財政的な理由などから堤防で守ることが困難であったため、吉野川沿いに竹林の植え付けが奨励されました。吉野川の堤防が整備されるにつれて、かつて緑の堤防のように連なっていた水防竹林は下流部ではその役割を終え、少なくなってきました。しかし、今日でも中流部では竹林が連なり、吉野川の洪水から地域を守るために役立っています。この話は、築堤が許可してもらえなかった時代に、次善の策として緑の堤防と言われる竹林の植付けを行った先人の知恵を描いたものです。

アクセス 西庄地区水防竹林記念碑

- JR三加茂駅より南西へ直線距離約1 km
- 東みよし町西庄山田69 八柱神社境内
- 緯度経度 北緯34度02分09秒, 東経133度56分23秒

